

漢詩との出会い

音読・暗誦を中心に自信をもたせて

愛知淑徳中学高等学校教諭

牧亮



「漢文」(今回は「漢詩」)を中学の授業で扱つのは、中国語や中国文学を教えるのではもとよりなく、あくまで日本人の古典としての「漢文」を学ぶことです。

そこで、日本語とは文法体系を異にする中国文語を教材とせずとも、日本語の文法に従つて訓読したいわゆる書き下し文で十分ではないかという声が現場にあることも確かです。しかし、古来日本人が刻苦して漢文訓読という発明をなし、それを発展させて、リズムカルかつ簡潔、明解な表現が日本語中に入り来たつて、現在の和漢混漭文に至つたことを生徒に体感させるためには、書き下し文でなく、「漢文」を示したいと思います。そして、訓読・暗誦をどんどんさせたいと思います。

中学・高校の両方で教えている私は、中学生の暗誦能

なんだ。「」って、びわびわしているうちに黒板に「一首書くんだけよ。」

春暁

孟浩然

春眠不觉晓

处处闻啼鸟

夜来风雨声

花落知多少

授業の一風景(生徒の発言は生の下に)。「」で示す。

A これ、なんだ?

生 「漢字ばかり!」「中国語だよ。」「中国語はあんな字じゃないよ。」「春」って、題じゃない?」「じゃ。

『孟』って作者?」「中国人だよ。」「うん。これは中国の詩かな。」「春』はわかるけど、その下の文字は何?」「見たことあるんだけど。」「とにかく『春』のなるとかだ。」「鳥』がいて……。」「『風』や『雨』もあるんだ。」「『眠』って、眠っているのかな。」「眠っていたら詩は作れないよ。」「でも『夜』って字もあるしよ。」「(なごごがやがや)

生 「先生。何か言ってくたさい。」

A それじゃ、これから言う言葉を、みんなは声に出し

力の高さに毎年驚かされます。個人の能力ではなく、中学期という年次の能力の高さのように思います。

国語教師 A・B・C の会話から

A えーつ。漢詩を二時間でやるの?」

B そうなのよ。子どもたち、漢文って初めてなのよ。語法や措辞、押韻、それに漢詩の歴史、作者や時代の説明なんかやったら、詩の味わいどころじゃないわ。

C 教科書には解説や鑑賞も載っているしね。あれを生徒に読ませて説明するのだから、けっこう時間かかるものだよ。

A せっかく「漢詩」を学習するのに、そんなことに時間とられなければいけないものかね。Bさんのあげたようなことを授業に押し込んで、生徒たちはたまらないかもしれないよ。もっと気楽に読ませて、大人になってふと口をいつて出たり、「あれ、この詩、中学のときに習ったことがあるぞ。」と思いついたり、そんなふうに生徒の心に残ればいいと思うよ。

B じゃ、漢詩は何を教えればいいの?」

C 返り点の基本的理解なんかは、やっておかなくては

A 僕は教科書なんて最初は使わないよ。教科書もノートもみんな机の中じゃあわせてだね、生徒が「なんだ

て繰り返ししてください。ついてこられるかな?」

生 「なんの?」「ん?」「ん?」

A とにかく僕の言うことを繰り返ししてこらんよ。いいかい? それでは、「シユンミンアカツキヲボエズ。」はいっ。

生 「シユンミンアカツキヲボエズ」

A いいねえ。さあもう一遍。

.....

生 「ハナオツルコトシルタシヨウ」

A へえー、みんなちゃんとしてこられたではありませんか。さあ、みんなが声に出して言ったのはなんなのだろう?」

生 「黒板に書いてある詩だ。」「最初が『シユンミン(春眠)』だもん。」「でも『不觉晓』は『アカツキヲボエズ』じゃないよ。」「いちばん下の字(曉)が『アカツキ』だよ。」「えーつ、それじゃ、下から読んでいくの?」「そりや変だよ。」「

A はい、みんなが声を出して言ったのは、この黒板の詩です。中国の詩だから日本では「カンシ」っていうんだけどね。どんな字ですか?」

生 「漢字の『漢』だ。漢字も中国の字ってことですよ。」「

『漢方薬』の『漢』もそつだね。」

A はい、「漢詩」だね。じゃ、「この詩を全部通して音読してみようよ。はい。」

生 「シユンミンアカツキヲボエズノシヨシヨテイチヨウヲキクノヤライフウウノコエ……」

A 次は、みんなそれぞれ三回音に出して読んで「びん。大声でなくてもいいよ。でも、自分の耳で聞けるように。」

生 「シユンミンアカツキヲボエズノシヨシヨ……」
A 今度はなるべく黒板を見ずに言ってみようか。こちらの見るのはいいよ。

生 「シユンミンアカツキヲボエズノシヨシヨ……」

A すこいね。全然見ずに言えちゃうね。

A さて、「春暁」ってなんだろっ？

生 「春のあかつきー」「あかつき」って朝だよ。」

A そつ朝だね。朝は朝でもいついゝらだっ？

生 「私たちが起きるころは『あかつき』っていわないから、もっと早いんじゃないっ？」「あけぼの」か。」

A 「春はあけぼの。きしやゆひくくなりゆく山きはははは。って覚えたよね。」「あかつき」は「あけぼの」よりもっと早いんだよ。夜明け前、明け方近くなんだ。

生 「へえーっ、そんなに早い時刻に何しているの？」

生 「うーん、『夜からずつと』ってことっ？」「そしたら朝になっても雨が降り続けているってことっ？」「暁のころぐっすり寝込んで鳥の啼き声で目を覚ましたんだから、やっぱり雨や風はおさまっているのよ。」

A 次の「花落つること知る多少」って、花がどれくらい散っちゃったんだろうかということだよ。

生 「夜の風や雨で花が散っちゃったんだ。」「どれくらいいなんて考えているんだから、この人、まだ家の中、布団の中かもしれないよ。」「夜中の雨や風のこと思い出したから、外の花のこと心配してんだね。」

A さあ、「シユンミンアカツキヲボエズ」。通して音読してみよう！（板書を数回読んで、次は一句ずつ消しながら音読（暗誦）していく。）

A これで、十五分だよ。一時間で三首はできるよ。

B でも、いろんなこと落しているんじゃない？ 訓点とか押韻のことなんてどうするの？

C 教科書にも「鑑賞」「や」「解説」もあるし。

A それは、もつとたくさん暗誦した後で、まとめてやった方が、よくわかるよ。最初はなんといつても、子どもたちに漢詩への抵抗感をもたせずに、なーんだ簡単だし、わかるじゃないかって、自信をもってもらおうことだ

『暁を覚えず』っていつんだから、気づかずに眠っているんだよ。「春の朝寝って気持ちいいしさ。」「でも次に啼鳥を聞く』っていつんだから、起きてるんじゃないっ？」「寝過ごした後に聞いてんのよ。」

A 何を聞いているんだい？

生 「啼鳥』」「啼鳥』っていつ鳥ー」「鳥を聞くって変じゃないっ？」「その鳥の鳴き声を聞いているんだ。」「啼』って「なく」って意味じゃないの？」

A そう！「啼」は「なく」こと。「泣く」や「鳴く」と違って、次々と声を出して鳴き続けること。次は？

生 「処処』の『処』って『ところ』のことだよ。

『お食事処』なんてあるし。」「じゃ、『と』って『た』だ。」「あつちつちじゃないっ？」「それじゃ、あつちつちの鳥の鳴き声で、目が覚めたんじゃない。」「布団の中で聞いてんのかなあ。」

A なかなかいい感じだねえ。その先もやってみようよ。

生 「次はだね。風や雨の音がしている。」「風や雨の中で、鳥は鳴かないよ。」「だから、『夜来』ってあるんじゃない。夜のことだよ。風や雨は。」「じゃ、朝になつたら雨も上がつてんだ。」

A 「夜来」は「先日来」とか「昨年来」なんていつねそのことを考えると……。

と思うんだ。

右、ささやかな一例をあげてみました。二年生の教科書では、「春暁」「絶句」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の三編が取り上げられており、どれも例にあげたような取り扱いが可能です。初学の子どもたちにふさわしいものだと思います。ほかに『唐詩選』の中よりいくつかあげてみると、「静夜思」「李白」「秋風引」「劉禹錫（りゅううしやく）」「照鏡見白髪」「張九齡（ちやうくしやう）」「涼州詞」「王翰（わんぱん）」「除夜作（じよく）」「高適（かうしやく）」「逢入京使（ほうにやうしやく）」「岑参（しんさん）」「九月九日憶山東兄弟（おのむかしのあにがむね）」「王維（わい）」などがあります。どれも暗誦しやすく、現代の子どもたちの感性で十分に理解でき、心に残るものだと思います。

例えば、この中の「秋風引」を中学二年で習って、高校生になった生徒が、次のように現代語訳をしてきました。

秋風引

劉禹錫

何処秋風至
蕭蕭送雁群
朝来入庭樹
孤客最先聞

秋風の歌

どこから渡る／この秋の風／音もなく／空には雁が南へ下る／朝からそよぐ／庭の樹々／たった一人のボクだけが／ふつと気づいた／この秋の風